絵本をもとにした子どもとの対話的表現活動の実践
～『だるまさん』と一緒に楽しむ ～

九州大谷短期大学幼児教育学科2年

久東由利香・田浦紗理奈・松島樹璃亜
鮎川唯・帆足茉優・古賀琉乃心・髙尾保志
池田夢来望・中島愛奈・西島萌々香・浜崎世里菜

題材とした絵本：『だるまさん』　文：かがくい ひろし　　絵：　かがくい ひろし
出版：ブロンズ新社 発行日:2008年1月　刷数:175

タイトル：「だるまさんと」

実践準備の担当：プロデューサー（鮎川唯、帆足茉優、松島樹璃亜）、小道具（全員）、記録・報告書（鮎川唯、帆足茉優、松島樹璃亜）

実践時の担当：だるまさん（高尾保志）、お姉さん（田浦紗理奈、久東由利香、池田夢来望、西島萌々香、浜崎世里菜）、ナレーション（松島樹璃亜、古賀琉乃心、中島愛奈）、カメラ・音響（鮎川唯、帆足茉優）

1. 題材『だるまさん』選定の理由

初めは『へんしんトンネル』にしていたが、3歳児との活動だったのでもっと子ども達が理解しやすいものにしようと考えて、「だるまさんが」シリーズにした。「だるまさんが」シリーズにする事で3歳児に、簡単に伝えることが出来そうだと思った。「だるまさんが」シリーズであれば言葉で説明する所も少なくなり、体を動かして遊ぶ事ができると感じたので、言葉ばかりで説明されるよりできるだけ沢山行動してみた方が、飽きたりすることも少なくなり、子ども達も最初から最後まで楽しむことが出来るのではないかと考えた。今回はリモートだったので言葉ばかりの説明では、余計に理解をしているのかなどが、分かりにくいのでは無いかと感じた。さらに「だるま」という存在そのものが分からなくても、だるまが簡単な言葉だけで説明出来る物なので、3歳児との活動を楽しむ時には適当なものだと感じたので、「だるまさんが」シリーズの絵本にしようと考えた。

（執筆者：中島 愛奈）

2.絵本の世界から遊びへの展開

　この題材において、私たちは子ども達とだるまで楽しく遊んでもらう他、特にだるまとお姉さんと一緒に体を動かしていくこと、まねっこ遊びを楽しんでほしいと考えた。そのため、身体的な活動として以下の遊びを考えた。

・ボディーパーカッション

　これは子ども達と身体を動かして行く中でリズムにのって身体を動かしていくことの面白さを知ってもらう活動の他、掛け声に合わせながら身体で大きく色んな動きをするので、子ども達が私達の動きを真似して楽しく動けると考えた。

・だるまさんがころんだ

　これは子ども達が鬼に気付かれないように「動く」「止まる」のメリハリをつけながら身体を動かしていくことの楽しさを知ってもらう他、教室全体を使いどうしたら鬼に気づかれないのか判断力を身につけながら画面越しでだるまさんと一緒に楽しく遊べると考えた。

・真似っ子遊び

　これは子ども達が画面を見ながら、私たちの動きを真似して楽しむ活動である。真似っ子遊びではだるまさんと登場人物を増やしてお姉さん達が一緒に子ども達と真似っ子をして遊んでいく活動になっている。この活動を通じて「こんな動きもできる」や「この動物の真似もできる」などの感情が芽生えてほしいと考えた。また真似っ子遊びをしながら「ビヨーン」や「ぴょんぴょん」など声に出しながら行うことで子ども達が楽しく真似をしながら身体を動かして遊べると考えた。子ども達同士で「ツンツン」と言いながら真似っ子をしていく中でお友達との関わりが増え生まれ、より楽しく活動できると考えた。

　絵本を元に作品を構成し、絵本にない動きを取り入れていくことで子ども達と楽しく活動を行うことができた。人がだるまの動きを表現するのは難しいことだが、お姉さん役を作り子ども達に分かりやすく動きを伝えていくことで私達の思いは通じると気づくことができた。

（執筆者：帆足　茉優）

3.実践に際して大切にしたこと

1人ひとり自分の思った動きを楽しんでもらいたいと考え、体を動かす遊びをすることに決めた。実際に子どもたちは楽しそうに体を動かし周りのお友達や保育者と一緒に飛んだり体を伸ばしたり楽しそうに動かしていた。その中でも、子どもたちの様子をしっかり見て、はっきりとした言葉で質問したり、声掛けをしたりすることを大切にした。テレビを見ている感覚ではなく一緒に活動していることを伝えるために、様々な工夫をした。

例えば、真似っ子遊びの時では子どもたちが私たちの動きを真似するだけではなく子どもたちに「次どんな動きしてみようか」と声掛けを行い、動きだけではなく会話も行った。真似っ子遊びをしながら声掛けを行うことで実際に繋がっていることを子どもたちに伝えることが出来た。

(執筆者：西島萌々香)

4.内容について

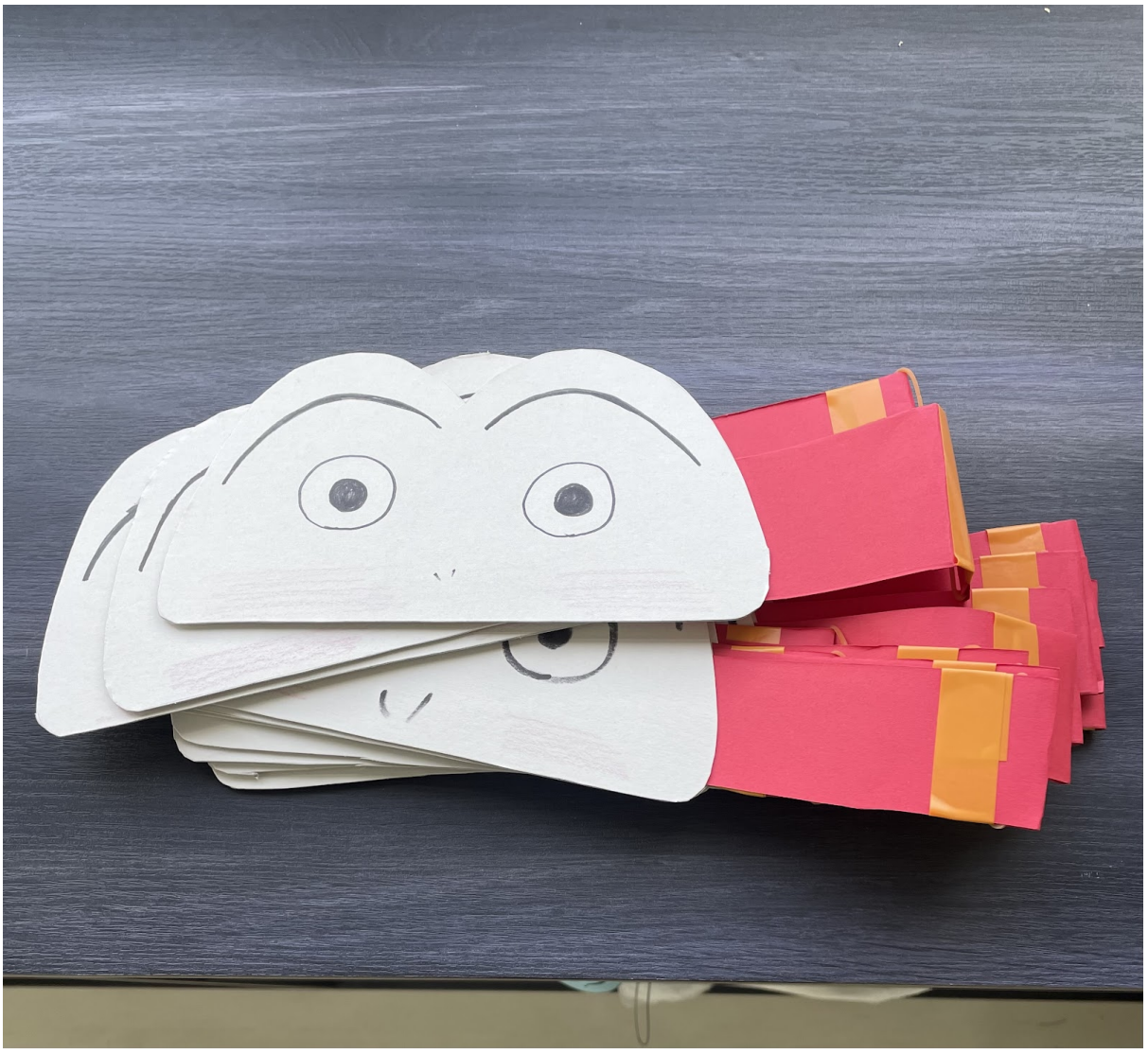
（1） 全体の構成

絵本「だるまさんと」シリーズを元に物語を構成した。また、活動を進行する上で、常に画面での子どもたちの様子を見て、確認しながら進めることで、一つ一つの動作の余韻を味わうことができることから、全体として、常に子どもたちの表情に着目するようにした。

導入では、お姉さん役2人が子どもたちとボディーパーカッションをした。その時に、子どもたちが聞き取りやすいように大きな声で身体を大きく使って子どもたちに分かりやすく動いた。子ども達が慣れてきた頃に動きを増やして2、3回繰り返すことを何度か行った。そうすることで、画面に映ったお姉さんの動きを真似することを理解してもらい、また、画面越しに繋がっていることを子どもたちに体験してもらえた。

次に主活動に入り、絵本の中には無いが、だるまさん役とお姉さん役2人が子どもたちと画面越しにだるまさんが転んだを行った。ナレーションの「だるまさんが転んだ」に合わせて子ども達も楽しそうに動いていた。だるまさんやお姉さんが動いてしまったり転んだりすることが子ども達にウケていた。「もう1回やりたい！」と子どもたちがアンコールしてくれたので子ども達が満足するよう要求に応えた。次の活動では絵本の中にあるようにだるまさんがいろんな動作をする様子をだるまさんとお姉さん3名で実際に表現した。これによって、それを子どもたちが真似て遊んだり、友達との触れ合いを楽しんでいた。だるまさんをリアルに再現したことによって子どもたちと親しみやすかったり、興味を持ってくれるようになった。真似っこ遊びでも「もう1回したい！」といった要求があったため、回数を決め

て子どもたちの反応が特によかった動作を取り入れて、最後まで子どもたちと楽しむことができた。
・お別れの際は一緒に遊んでくれたお礼としてだるまさんのお面をプレゼントした。



（執筆者：松島樹璃亜）

（2） 子どもたちとの対話について

子ども達に問いかけた際に反応や声を聞き、コミュニケーションをとった。「見えてるかな？」や「聞こえてるかな？」、「いいかな？」などの動作を取り入れて、子どもたちにも「聞こえてたら丸してね」と呼びかけを行った。それをすることで子どもたちの反応を見れたりスムーズに次の内容に入れたりできる。また、画面越しで子どもたちの応答に反応するときに子どもたちが分かるように大きくリアクションをした。だるまさんが転んだをしている時に、3回で終わる予定が子ども達が「もう一回したい」と反応してくれて、子ども達との画面越しでやり取りが上手に出来た。「最後だよ～」などこっちからの言葉に反応をしてくれて、お互いに理解している状態でだるまさんが転んだが出来たと思う。

（執筆者：久東由利香、田浦紗理奈）

（3）表現の工夫

だるまさんが転んだをするために画用紙や赤色のビニール袋を使ってだるまを作った。だるまさんが転んだで使用する木をダンボールに画用紙を貼って木を製作した。カメラ配置では木が見えるようにカメラの角度を合わせて、場所が分かるように見印になるテープを床に貼った。カメラ配置を工夫して遠近法で立体感を出せたと思う。また、真似っこ遊びでは子ども達が出来るような動きを考えた。例えばうさぎ、カエルなどの動物の動きやつんつん、こちょこちょなどのお友達同士で楽しめる動きを考えた。ナレーションでは、子ども達にテレビを見ていると感じさせないように反応に細かく応えたり、1つの遊びを行ったら感想を聞いたり次にしたい動きなどを聞き、子ども達が楽しめるように工夫した。

執筆者（高尾　保志、古賀 琉乃心）

（4）　プレ幼教こども劇場における子どもの姿と省察

まず、導入として動物のイラストの一部を見せて、当ててもらうようなクイズを行った。思っていたよりも簡単だったのか、子どもたちはすぐに答えていた。次にだるまさんが転んだを子どもたちと一緒に行った。「だるまさんが転んだ」と子どもたちと一緒に言う予定であったが、言っている子どもが少なかったため、一緒に言う練習を行う必要があると思った。また、前に進むのが早い子どももいたため、ぶつかりそうになり、一度後ろに下がってもらう必要があった。そして、次にまねっこあそびとして、動物の動きを真似するというものを行った。子どもたちが自分で考えて動くのではなく、私達の動きを真似するだけだったので、自分たちで考えて動けるようにするともっと楽しめるのではないかと思った。
全体を通して、子どもたちの反応にたいして、こちら側もしっかりとリアクションをすると、もっと一緒に世界観に入り込み、楽しめそうだと感じた。

（執筆者：池田夢来望）

（5）取り組む過程での改善と工夫

子ども達は「だるまさんが転んだ」、「真似っ子遊び」を楽しんで遊んでくれた。しかし、プレ幼教こども劇場で「だるまさんが転んだ」をする際に子ども達はどこまで進めばいいのか分からず画面の目の前まで来てしまっていたため、紐を準備し「この線まで来てね」と声掛けをして子ども達が「だるまさんが転んだ」を楽しめるようにした。また、赤だるま以外のだるま役として出ていた学生は衣装がカラフルでだるまのような動きをしていなかった為、子ども達から「忍者みたい」という認識があったことから幼教こども劇場ではお姉さんとして登場した。真似っ子遊びでは学生がお姉さんになり、ナレーションが言った擬音の動きを真似したりオリジナルで動いたりして身体全体を使って遊びを楽しんだ。

プレ幼教こども劇場では全体的に子ども達の声や行動に反応していないことが多かったので幼教こども劇場では画面の子ども達の様子や声をよく聞いたり、見たりして声掛けをしたり反応した。「だるまさんが転んだ」、「真似っ子遊び」ではお姉さん達は最初喋らないようにしていた。しかし、子ども達と会話ができた方がテレビを見ている感覚にならず、みんなと会話ができたり、一緒に動いてみたりすると繋がっていることを感じやすいと思ったので喋るようにした。

リハーサルをした時には、次のセリフや動きが分からず戸惑ってしまっていたので、カンペを作りスムーズに進められるようにした。また、アンコールをする時はどの動きをするのかを決めていたり子ども達が楽しんでくれていた遊びをもう一度したりした。

（執筆者：鮎川 唯）

（6）幼教こども劇場での子どもたちの様子

「幼教こども劇場」を実践して、私たちの声かけに元気よく即座に言葉を返す姿が見られ、一緒に楽しんでくれていた。リモートの環境や声の小ささなどで伝わらない時にどうしたらいいか戸惑っている様子も見られた。だるまさんが転んだの時には一緒にだるまさんに近づき、体を動かすことを楽しんでいた。体を動かす遊びの時には自分で考え、みんなそれぞれ違う動きを楽しんでいた。まわりのお友達と話しながら楽しそうに笑っていた。また私たちが話している時は、しっかり話を聞き、一生懸命理解しようとしてくれていた。動く時は楽しそうに動いてくれていた。私たちが「聞こえてたらまるしてね」などと声をかけると、しっかり画面に向かって、まるをしてくれ、聞こえない時は「聞こえないよー」と教えてくれ、こども劇場をスムーズに進めることができた。一日目の体を動かす遊びの時にブリッジなどの難しい動きがあり、子どもたちも「難しいよ」と言っていたので2日目で難しい動きを無くし、子どもたちでも簡単にできる動きにしたらとても楽しそうにしていた。

（執筆者：浜崎世里菜）

5.取り組みを通して学んだこと、得たこと

【鮎川 唯】
　今回の幼教こども劇場を通して、グループの中でコミュニケーションをとり情報共有をすることが大切だと学んだ。準備の過程では初めはそれぞれが準備を行い劇に必要な小道具を作ったり衣装を作ったり製作を行っていた。段々と製作が終わってくると手が空いてしまい、することがなくなってしまうという場面があった。小道具の作り始めが遅かったため本番前日まで製作に時間がかかってしまい、リハーサルを充分に行うことが出来なかった。そのため、劇全体の流れがスムーズにいかず課題が多く残った。グループ内での情報共有が不十分だったため劇の流れを一部の人は分かっていても内容が全体に行き渡っていなかった。初めから役割分担を行い、「これをして欲しい」や「あれを手伝って欲しい」など声掛けをしていれば準備も早く済み、リハーサルに多くの時間を作れたのではないかと思った。保育の現場に出た際には今回のことを活かしてコミュニケーションをとり「報連相」を大切にしていこうと思った。

【池田 夢来望】
　今回の幼教こども劇場において、子ども達の気持ちや目線から、どうすれば一緒に楽しむことができるのかを考えることが大切だということを学ぶことができた。また、子ども達の反応に対して、応答するようなリアクションを取ることの大切さが分かった。プレ幼教子ども劇場の時点では、真似っ子遊びをする際に、ただ私達の真似をするだけであったが、本番では「びょーん」や「ちょんちょん」などの擬音から子ども達が自分たちで考えて動けるようにした。そして、最初は子ども達の反応に対して、すぐに返答することができていなかったり、リアクションを取れていなかったりしていた。しかし、本番では、子ども達が反応したことに対して、応答的なリアクションを行った。子ども達が「もう一回したい」といえば、もう一度一緒に行うととても嬉しそうにしている様子から、子ども達が反応してくれたことを放置するのではなく、きちんとリアクションすることが大切だと感じた。

【久東 由利香】
　幼教こども劇場を通して、何があっても最後までやり遂げることを学んだ。準備では、導入で子ども達と一緒にクイズや真似っ子遊びができるように動物のペープサートを作った。しかし、だるまさんに関係していなくてボディーパーカッションに変更して行った。子ども達と一緒に体を動かして楽しめるように5個の動作を考えた。グループ内での準備では最初赤だるま以外の人たちもだるまになって登場することになっていたからピンクやオレンジ、黄色などのカラーポリ袋を使って衣装を作ったり自分たちのお面を作ったりした。しかし、プレ子ども劇場で衣装を着ることでだるまさんに見えないという声があり本番では衣装を着るのをやめお姉さんとして出た。また、だるまさんがころんだをする時に背景が悲しいのでダンボールなどを使って木を作った。実践の際の子ども達の反応は、画面越しだときちんと伝わっていない部分もあり子ども達は分かってない状態で次の内容に進んでいた。しかし、子どもに問いかけの際に動作を入れて行うことで子ども達と上手くコミュニケーションをとれたり一緒に体を使って楽しく遊んだり、「もう1回したい」という声もあった。今回の経験からコミュニケーションが大切だと感じた。

【古賀 琉乃心】
　まず絵本の題材を考えるところから最初は「へんしんトンネル」で計画を進めていたが無理な部分が多く、みんなで話し合い、だるまさんに変更した。出演者、ナレーター、裏方などを決め脚本を何度も何度も調整しながら制限時間や子どもたちが分かりやすいように話し合いをした。プレで九州大谷幼稚園の子どもたちとだるまさんをして課題が沢山挙げられ、そこからこどもたちに伝わりやすい言葉選びや説明の仕方、立ち位置など先生方にも相談し作り上げた。先生の意見でどこからだるまさんが転んだを始めるのか分からないということ、自分たちの思う動きを言葉で押し付けない、学生のリアクションの薄さなどをはっきり変えようと台本を変えた。本番では事前に聞いていた子どもの人数が違ったりプレと反応に差があったりと予想外のことが多いところもありそれも含めとてもいい経験になったと思う。
　子どもたちも反応が良く、楽しんでいる様子が伺えたので時間はちょっと足りなかったけど安心して本番の時間を過ごすことができました。プレがあったからこそ直す課題が浮き彫りになったので休まず参加して良かったと思う。

【田浦 紗理奈】
　幼教こども劇場を通して、何事も最後までやり遂げる事を学んだ。本当に間に合うのかなや大丈夫なのかと不安があったけどみんなでやり遂げることが出来た。グループ活動や子ど

も達との画面上での関わりを通して話を聞くことが大切ということを学んだ。プレ子ども劇場では、導入でペープサートをする事になった。ペープサートには動物の絵を描き子ども達に答えてもらったり、動物の真似をしてもらった。本番の子ども劇場では、ボディーパーカッションに変わった。ボディーパーカッションをする時に、子ども達に見えやすいように大きく体を動かしたり、子ども達にスピードを合わせるような工夫をした。子ども達の反応もすごく良く、ボディーパーカッションをして良かったと思う。グループ内での準備では役割を決めたり衣装を作ったりした。衣装を作ったが、プレ子ども劇場で「だるまに見えない」など意見をもらい本番では着ず出た。劇の練習をする時は、最初まだ流れを理解していない事もありグダグダだったけど、練習を重ねていくうちに流れを把握し少しはスムーズに進めるようになった。本番では「だるまさんが転んだ」を3回で終わる予定だったが、子ども達が「もう1回したい」と言い想定外な事が起きた。でもナレーションとの合図で想定外だった事を乗り越えることが出来た。

【高尾 保志】

今回の幼教こども劇場を通して感じた事は、最初に絵本を選ぶ所がとても難しく，どの絵本だったら子ども達に絵本の世界を楽しんでもらえるのか考えていた。最初は、別の絵本にしていた。しかしこの絵本だと難しいと感じだるまさんがと言う絵本にした。次にどのような事をして子ども達と楽しめるかを考えた。その際にだるまさんが転んだとだるまさんと真似っこにしようとなった。やることが決まったが、それに向けてどう動いたら良いのか全く分からず制作をしていましたが一人一人がやる事を見つけ物事に挑戦していったと思う。本番では、最初子ども達の声が聴こえずどのようにしたら良いのか分からなかったが映像を見ながら子どもたちの様子を伺いながらなんとか出来た。次の劇場では、子ども達の声や要望でだるまさんが転んだを何回かすることができ子ども達も楽しそうでとても良かったと思う。自分達がしないといけない事を最大限に行動できたと感じますこのような機会は、滅多に無いのでとても良い経験になった。

【中島 愛奈】

今回の幼教こども劇場を通じての最大の学びは「報連相」の大切さである。準備をする過程で、誰がどんな事をしているのかどんな事をした方が良いのかという事が分からない時が

何度かあった。そんな時、自分から聞くこともあったがなかなか聞けない時もあったなと思った。そんな時に全員が集まってどんな事をしていたのかなどの報告をしっかりと出来ていれば良かったと感じた。初めてする事だったので、戸惑ってしまう事があった。そんな時に話の構成を考えてくれていた人などに相談をもっと沢山してコミュニケーションを取り合っていればもっと良い活動になったのかなと感じた。報告しない事が悪いと決めつけるだけでなく自分からももっと行動にうつしていけたら良かったと思った。子ども達が自分達が考えたものを楽しんでくれている姿を見て、達成感を感じた。2日目ではだいぶ慣れたので子ども達の反応を見ながら会話をする事が出来た。なので、「慣れる」という事も大切なのだと分かった。

【浜崎 世里菜】
　今回の幼教こども劇場ではどのような出し物をしたら子ども達は楽しんでくれるんだろう、子ども達にどんな声掛けをしたらいいんだろうと分からないまま活動していき、準備の際も上手くいかないこともあったけれど自分が受け持った役割を一生懸命やり遂げられたと思う。実際に子ども達の前に立つと考えていたものとは全然違い、テレビ越しでは伝わらないことも多く難しいなと思った。だるまさんが転んだでは昔ながらの遊びなのに今の子ども達もよく知っていたのでこの絵本を選んで良かったなと思いました。体を動かす遊びでは1つのお題の中から子ども達はそれぞれ違う動きをし、自分なりの動きを楽しんでいるように見えた。私達が「上手だね」と言うと嬉しそうに笑っていてとても安心した。動く時は全力で動き、私達の話を聞く時はしっかり聞いてくれていてとてもやりがいがあった。今回の幼教こども劇場は保育者にとってとても大事な学びになったと思うので保育の現場で活かしていきたいと思った。

【西島 萌々香】
幼教こども劇場を通して、実習とは違った子ども達との関わり方で画面を通して子ども達とコミュニケーションを取るのは難しくて特にプレ幼教劇場では声が聞き取れなかったりして子ども達が何をしてらいいのか分からずに固まっていて保育者の声掛けで動いたりとスムーズに進めることが出来なかったが前に出るお姉さん役の人達は体で丸を作ったりと声を出すのが苦手な子どもでも参加しやすくしたりとみんなが楽しく体を動かして真似をしたりとできるように考えて、最初はどのように子ども達と関わればいいのか分からなかったけど、プレ幼教劇場や他のグループの人達の子ども達への声掛けなどの対応の仕方を見て「ぴょんぴょん」や「びよーん」、「けんけん」などと擬音の言葉を使って子ども達に真似をしてもらいやすいようにしたりと子ども達が楽しく体を動かし自分なりの動きをして楽しむことを結果に出せてよかったとこ思う。また、声が届かない時は体で丸やバツをして子ども達とコミュニケーションを取ることの大切さを学んだ。

【帆足 茉優】
　今回の幼教こども劇場を通して、子ども達への言葉かけの大切さ、グループの中でのコミュニケーションをとっていくことの大切さを学んだ。
　子ども達への言葉かけでは、実際に画面越しで関わっていく中で声が聞こえなかったり、時差があったりと子ども達への言葉かけは難しく感じた。練習をしていく中で子ども達の声が聞こえるように子ども達が喋っている時には全体のマイクの音量を消して、声が聞こえるようにすることでコミュニケーションを取っていくことができると分かった。動いている時には子ども達が落ち着いて座れるように「元の場所に戻ってね」など分かりやすく言葉かけを行うことが大切だと思った。
　グループの中でのコミュニケーションを取っていくことは、準備の段階ではなかなか出来ず本番ギリギリまで制作を行っていた。早くからグループの中でしっかりとコミュニケー

ションを取り、これをして欲しいなど伝えていくことが大切だと分かった。一部の人だけが準備状況や劇の内容を理解するのではなくグループ全体でしっかり情報共有を行うことが大切だと思った。
　今回学んだことは保育者にとって大切なことだと分かったのでこの経験を活かしていきたいと思った。

【松島 樹璃亜】
　今回の幼教こども劇場を通してグループ内での情報共有（サークルタイム）が大切だと学んだ。
　劇の流れを考えたり制作をしたりと準備を進めていくなかでグループ間での情報共有ができていなかったため準備の量に偏りが出ていた。また途中で絵本を変更したので1から考え直しになり、本番までの期間も短く全ての準備がギリギリだった。誰が何をするのかなど役割分担もしていなかったためグループ全体でではなく個人で作業を進めることが多かった。手が空いてる人に「これを手伝ってほしい」「あれをやってほしい」とお願いすること、コミュニケーションをとることも大切だと思った。リハーサルのスケジュールを組む際もグループ全体で話し合って日程を決めた訳ではなかったので全員揃ってのリハーサル、最初から最後まで通して課題点を見つけたりなどあまりできなかった。そのため本番でも全員が劇の流れを100%理解していない状態で戸惑う場面も多くスムーズにいかなかった。2日目では1日目で流れを知ってある程度慣れていたためスムーズに進めることができたが、もっといい作品ができたのではと思い悔しかった。何でも勝手に進めるのではなく全体で話し合い全体で決めていくこと、報連相が大切だと改めて思った。保育の現場に出たら報連相を大切にしようと思った。